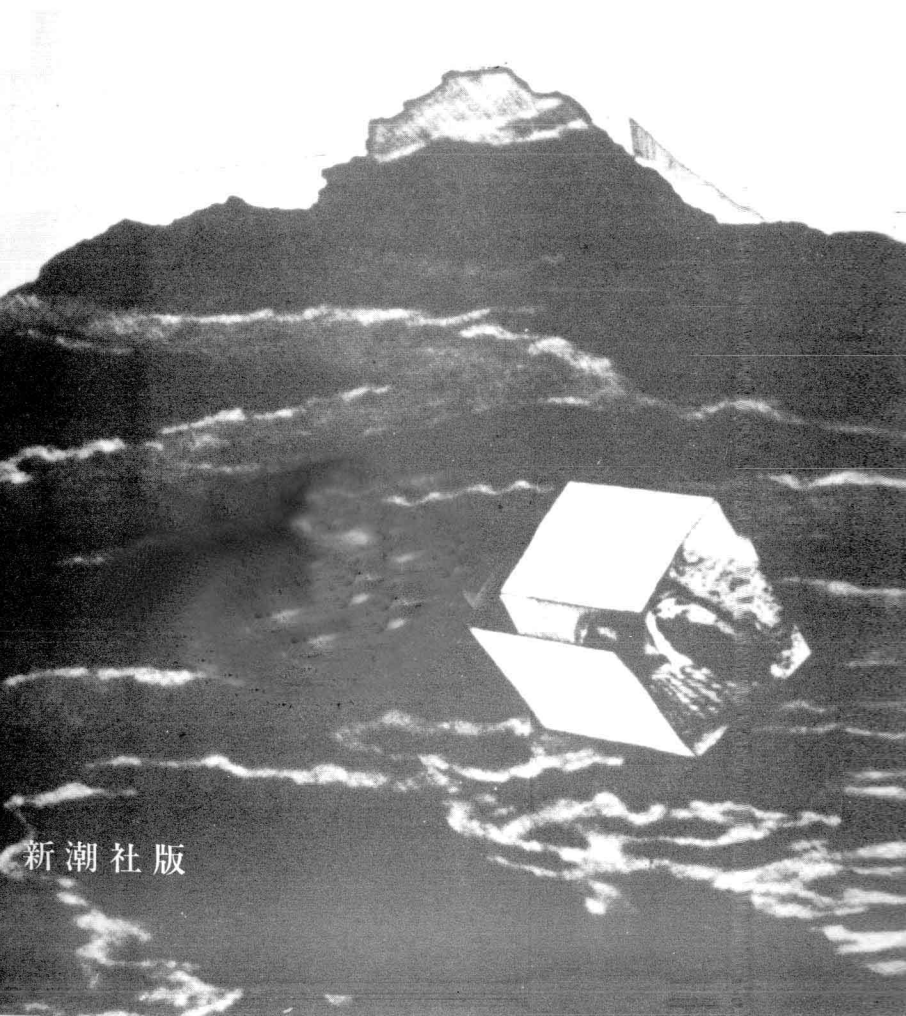


青銅時代

青銅時代 小川国夫



新潮社版

発行 ■ 昭和四十九年九月十日

二刷 ■ 昭和四十九年十月二十日

著者 ■ 小川国夫 (おがわくにょ)

定価 ■ 六八〇円

青銅時代 (せいどうじだい)



発行者 ■ 佐藤亮一 発行所 ■ 株式会社新潮社

郵便番号一六二／東京都新宿区矢来町七一／電話〇三二六六一業務五二一一・編集五四一二／振替東京八〇八

印刷所 ■ 東洋印刷株式会社

製本所 ■ 神田加藤製本

©Kunio Ogawa, Printed in Japan 1974

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

青銅時代

颯風が通過した土曜日の夜、私は三年生の作文を読んだ。私が与えた題は「生き甲斐又は自殺について」だったが、こういう題は、彼らの不満や反逆の言い分を引き出してくる。或る生徒はこう書いていた。

僕は実際の社会を知っているとはいえないから、夢をふくらまし、それを食べて生きているようなものだ。夢にエネルギーと時間を費している。夢は僕を水中に引き込む垂鉛だ。^{おもり}そこで友達や肉親や先生のことを考えるけれど、そこが自分という水の中だということはどうしようもない。最近静岡北高校で自殺した人についてかなりくわしく聞い

た時にも、このことに気づかせられた。あの人は純粹に自分のために生きさせられてしまっていた。自分という海に……。彼は死者となつて、海面に浮かび上がったわけだ。それを見て、舟の上にいる人があこう言つたところで、どれほどの意味があるか。彼のように自殺しないまでも、潜水している人を、舟ばたから見ても、さっきはあそこにあった、今はこっちにいるなどと眼で追いかけても、どれほどの意味があるか。僕はそんな監視の中で生きたくない。そんな監視はもともと無意味ではないか。

また次のように書いた生徒もあった。

社会という言葉は見捨てられてしまっている。人間にとって社会など大した価値がなかったのに、社会、社会といわれすぎたのだ。今日まで来てしまえば、全く無価値な言葉となつてしまった。だれが社会のためなどと考えているのだろうか。ちょうど金持とか有名という言葉

がいやらしいのと實際は同じことなのだが、一つ進うところは社会のために自分を賭ける人はいないということだ。社会のために自分を汚す人はいないということだ。それほど社会は腹の底では軽く見られてゐるのに、ちょうど昔はちゃんまげに結い、今は今の髪形があるように、社会という言葉を口にしていないと、のけものにされそうな気がするのだ。僕は、金持になろうとして、また有名になろうとして、あくどいことをする人々を勇気があると思う。戦争屋だって勇気がある。信じていないこと（『社会』）を信じていないとみとめ、たとえ狭い範囲ではあっても、生き甲斐を自分でつきとめようとする、嘘をいわない勇気がある。

こうした作文を読みながら、私は、或る生徒については認識を改めた。それまでの彼の顔が、急に翳りが深くなるように思えた。それで、私は、作文に引き込まれて読んでいたが、吹きさぶ颪風の動きもそれとなく追っていた。被害者には怒られるだろうが、清々しい期待に似た気持で、雨風の移り行きを感じ取っていた。作文を読みましたのは午前三

時だったけれど、その時には雨は止み、湿った風が吹きまわっていた。外へ出て見ると、真暗闇の中に竹藪の大波が見えて来て、感情を捲き込んだ。生徒たちと自分、この土地、その他一切が違和感なく融け合っていた。

翌朝、いくぶん衰えた風の音の中に眼を醒ました。ゆうべの興奮の余韻が、気持よく体に残っていた。時計を見ると十時を廻っていた。その日は東京から満枝が来ることになっていた。五日前電話があつて、藤枝駅へ着く時間を知らせて来たので、もし駅に私の姿が見当らなかつたら、待たずに下宿へ来てくれ、といつてあつた。すでに十時過ぎでは藤枝まで出向くのはとても駄目だったので、私は青洲駅まで迎えに行くことにした。藤枝からここまではバスでも来れたが、私は彼女に、地方鉄道に乗ることを勧めておいたのだ。

不通になっているかも知れない、と思いながら、私は青洲駅へ行った。この駅はいい所にある。ホームと平行して寝姿の小山があつて、見事な松に覆われている。その松林に縁^{ふち}取られて、睡蓮に半分ほど水面を埋められた池があるが、水が溢れていて、ほとんどホームにとどかんばかりだった。私はそこで、小綬鶏の啼声を聞きながら、満枝を待っていた。風はかなりさえぎられていて、空気が冴え返っていた。煙草がうまかった。私は深い息をした。そして、今ここへ来る道で、大きな楊が裂けていたのを目に浮かべた。裂目は蔭の

中で青白く、美しかった。折れてしまった片割れは、幹と樹皮で繋ぎ止めていただけだから、やがて枯れるだろう。しかし、葉は風に靡え、一枚一枚揺られるのにも強く抵抗していた。その様子は、好きな音楽の主題のように、私の体の中で繰り返されていた。

*

列車が山の裾を廻って現れた。煙を長々と棚引かせて、例の小まめに走る感じで、駅へ近づいて来た。私が見当をつけた通り、満枝はその列車に乗っていた。予想していたのより、濃くきれいに見えた。彼女はデッキにいたので、私は速さを合わせて、平行して少し歩いた。列車が少しの間徐行するのが、もどかしかった。細々したことで、見きわめたいことが一杯ある気がしたのだ。列車が止まると、

——おしゃれになったのか、君は、と私はいった。

彼女は笑い出して、

——着くといきなりそんなふうにいるの……、といった。

——僕も変ったかい。

——変ったようね。元気になったみたい。こんなに爽かな場所で逢ったことないから、よく判らないけど。

——田舎教師になりたかったんだ。なれたかい、どう思う。

——田舎教師っていうの、どういふものか判らないもの。逢ったばかりで、そう聞かれ
たって判らないわ。

——逢ったばかりだから、判るんじゃないかと思ってさ。

——わたし今日、戸惑っているみたい。汽車の中でも、あなたのこと考えるより、景色
にばかり気を取られていたわ。

——颱風か。波が凄かったろう。

——凄かった。本当に凄かった。びっくりしちゃった。どう、波にも馴れた……。

——ゆうべは、僕がここへ来てから最大の颱風だったな。

——いつ移ったんだっけ、こっちは。

——夏休が終って十日してからだったから、まだ一月と十日か。ここへ下宿してよかつ
たって思っているよ。

——骨折りだったんでしょ、下宿探すの。

——ムキになったな。

——移るだけのこと、あったわよ。わずらわしい人がいなくて、一人でこんないい所に暮しているのって、しあわせでしょう。

——わずらわしい人がいなくて、か。学校はわずらわしい時もあるけどな。

——仕事は仕方ないわ。でも、面白いことだってあるでしょう。

——あるな。嬉しくなることだってあるよ。どうだい、君の方は面白いかい。

——仕事……。なんだか面白いことってない。最近は職場で自殺した人もあるし。

——死んだの……。どうして。

——奥さんとのことらしい。会社の重役のお嬢さんを貰った人なの。それで、結婚して三ヶ月だったのよ、死んだの。冗談いいながら走り廻っていて、張り切っていたように見えただけど……。

——僕が見ている人……。

——見た人かっていうの。そうじゃない。あなたは知らない人よ。係長さんだったわ。
……。

——二十七なんですって。

——歯車が一個、自分から外れたくなつたんだな。

——だれもそんなふうじゃあないのかしら。

——君も外れたくなつたら、ここへ逃げて来てもいいよ。

——来させてくれるの。

私たちは国道へ上がった。さすがに交通量はいつもより少かったが、急送の大型トラックが飛ばす細かいしぶきが、素足に感じられることもあった。私は彼女に、家の軒下を歩くようにいった。それから静かな脇道へ入って、八百屋の前へ行くと、

——ご馳走作るわね、と彼女はいい、そこで、三つ葉と若布と、それから牛乳と林檎を買った。並びの魚屋でさよりの生干しと蛤を買った。

下宿へ着くと、彼女は私の朝飯兼昼飯をこしらえてくれ、自分も少し食べた。食事のあと、私は牛乳を飲みながら林檎を食べた。これは私の変な好みだったが、彼女も、

——つき合うわ、といってそうした。

私が林檎をむいて渡すと、彼女は受け取りながら、急に気遅れした眼で私を見上げた。

そして、一口ずつ牛乳を飲みながら、眼を伏せて視線をうろつかせていた。途方にくれているようだった。

——今日はこの辺を歩こう、と私はいった。

——帰るわ、と彼女は呟いた。

——……。

——わたしお午の汽車で帰るわ、と彼女がいい、微かな音をたてて息を吸い込んだ。

——どうして、と私は聞いた。

——……。

——どうしたの、急にかしまって。

彼女は黙っていた。牛乳の入った湯飲みを置いて坐り直し、私を見た。怖がっているようだった。なにげなく遊んでいた鳥が、突然狐師の前にいることに気づいたようだった。そうした満枝を見ていると、私は、自分の体が一気に逸はやって来るのを感じた。

——君は気まぐれだ、と私はいった。

彼女はひるんで、坐ったまま消えたいと思っっているように見えた。私は彼女の髪を掴んで、

——気まぐれ、といった。

彼女が苦しげにする息が判った。私は彼女の顔を仰向かせて、長い間手に顫えを感じて

いた。そして、あの唇を吸い、体を畳に倒そうとした。

——帰るわ、帰るわ、と彼女はいい、倒れまいとした。

私は容赦なく圧した。

——保彦さん、と彼女はいい、私の手を押しのけようとした。三つの手が、三匹の動物のように争って軋った。

——いけないわ、明るい、と彼女はいった。

私は彼女を見まいとした。しかし、さっき手に感じていた、彼女の体の芯しんから湧いていくような顫えが、かけがえのないものに思えてならなかった。あの瞬間があった以上、私は引き返せなかった。

——いけないわ。わたしいやよ。

——だれも来れない。だれも見てなんかいない。

私は新式の把手ノブのついたドアのことを頭において、そういった。やがて、彼女のおびえは収まり、体が緩んで行くようだった。私は体同士が近づいたのを感じた。彼女の苦しい顔に葉影を感じながら、少しの間、私はあの体の中に入っていた。

*

満枝は立ち上がると、裏手の窓を細く開けて外を見ていた。斜に流れ込む風に髪が揺れていた。私も立ち上がりながら、

——洋服を皺にしてみました、といった。

彼女は私を見ないで、洋服を眺めていたが、

——いいわ、とかすれた声でいった。

彼女の肩ごしに戸外を見た。大気には真珠色の光が融けていた。稲は打ちのめされて、水に浸されてうなだれていたが、例えば木槿むくげの列はせわしなく風に反撥はんぱしていて、真白い苔をきわ立たせていた。楨垣をめぐらした農家が島みたいに点々と散らばっていて、屋根を翳らせている櫛や樟も、執拗な風のゆすりを泳がせていた。梢から離れた葉は空の奔流に入り、雲の模様にまぎれこんでいた。私には、風のコースが見えた。

——人間て若いうちは、風が吹くのが好きなんだって、と私はいった。

——そう、と彼女は応えたが、心はこっちを向いていないようだった。

——今日は来るのを止めようと思わなかったかい。

——ううん、と彼女はかぶりを振った。

——僕は来るものと思っていたけど。

——さっき海が凄かったわ。

——……。

——ごうごういって、線路のすぐそばまで這い上がっていたわ。あそこで、むこうところちが隔てられてしまうこともあるんでしょうね。

——……。

——なんだか遠くまで来た気がするの。

——波を見に行こうか。

——……。

——行かないか。

——いいわ。

私たちが汽車に乗って、潮垂^{しおだれ}駅についた時には、空はさっきより明るくなっていた。真珠色の光の中に、海が吼えていて、小さな駅へなだれ込みそうな勢だった。ホームに立つ